

## 2020年6月7日 説教「ヨセフに夢をみさせられた主」

創世記 37 章 1～11 節

アブラハム、イサク、ヤコブに続きヨセフの生涯の学びを開始します。

### 1. 父から愛されたヨセフ (1～4 節)

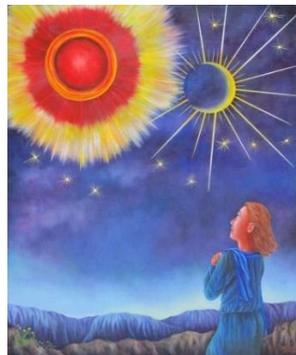
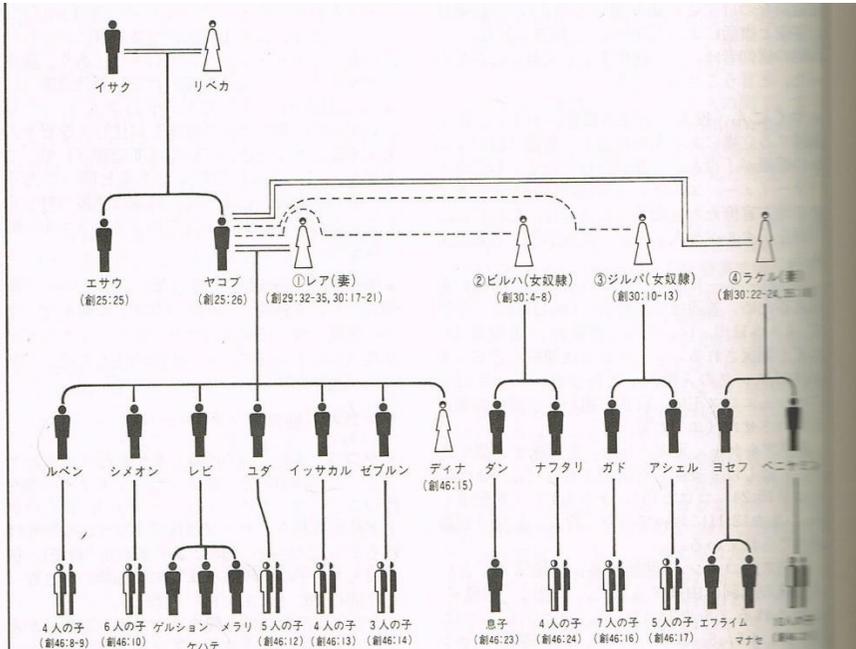
①ヤコブはカナンに住み (1)「**ヤコブは、父が一時滞在していた地、カナンの地に住んでいた。**」アブラハム、イサク、ヤコブと続く家は神との契約の中に継承されてきました。兄エサウ欺いた結果、その怒りを恐れ、ヤコブは離れた地に生きました。20 年が経ち、導かれてカナンに戻り、エサウと和解しました。その後、ヤコブはエサウとは別に、イサクが一時滞在した、カナンの地に住むようになりました。

②兄弟達の悪い噂 (2)「**これはヤコブの歴史である。ヨセフは十七歳のとき、彼の兄たちと羊の群れを飼っていた。彼はまだ手伝いで、父の妻ビルハの子らやジルパの子らといっしょにいた。ヨセフは彼らの悪いうわさを父に告げた。**」叔父ラバンの地パダン・アラムでヤコブはラバンの娘レアとラケルを妻としました。また、女奴隷ビルハとジルバをそばめとして近くにおきました。そして、4 人の女性から 12 人の子どもたちを得ていたのです。そのうちの 11 番目、ラケルとの間に生まれたがヨセフです (裏面の家系図を参照)。さてヨセフが 17 歳の時のことです。彼はお兄さん達と共にいて、羊の群れを飼う手伝いをしていました。そんな時に、ヨセフはビルハとジルパの子供達 (ダン、ナフタリ、ガド、アシエルの中の全員か数人) についての悪い噂を聞いて、これを父ヤコブに告げました。

③父はヨセフを愛し (3～4)「**イスラエルは、彼の息子たちのだれよりもヨセフを愛していた。それはヨセフが彼の年寄り子であったからである。それで彼はヨセフに、そでつきの長服を作ってやっていた。彼の兄たちは、父が兄弟たちのだれよりも彼を愛しているのを見て、彼を憎み、彼と穏やかに話すことができなかった。**」イスラエルというのはヤコブのことです。カナンの地にもどり、主からの祝福をいただいた時、イスラエルと呼ぶように主から言われたのです (35:10)。そのイスラエルは愛妻ラケルから生まれた、年寄り子のヨセフを格別にかわいがりました。そして、袖付き長服を作ってやったのです。他の兄弟達とは違う扱いでした。それを知り、兄弟たちは父ヤコブから特別の愛をもらっている、ヨセフの存在を妬ましく思い、憎むようにさえなっていました。穏やかに話すことはとてもできませんでした。

### 2. ヨセフの夢と兄達の怒り (5～8 節)

①ヨセフの夢 (5)「**あるとき、ヨセフは夢を見て、それを兄たちに告げた。すると彼らは、ますます彼を憎むようになった。**」ヨセフは寝ていて、不思議な夢を見たのです。そして、それをそのまま兄たちに伝えたのです。その内容を考えれば、披露するのを遠慮したいところですが、そこがヨセフの性質なのでしょう。そのまま告げたものですか



ら、兄たちはますますもってヨセフを憎むようになりました。

②おじぎする束 (6~7) 「ヨセフは彼らに言った。『どうか私の見たこの夢を聞いてください。見ると、私たちは畑で束をたばねていました。すると突然、私の束が立ち上がり、しかもまっすぐに立っています。見ると、あなたがたの束が回りに来て、私の束におじぎをしました。』」兄たちに伝えた夢の内容はこうでした。畑において、おそらくは麦の束でしょうが、束ねていると、突然とヨセフの束が直立したというのです。やがて、兄弟たちの束がヨセフの束を囲むようにして、ヨセフの束に向かっておじぎをしていたという夢だったというのです。

③兄達の怒りと憎しみ (8) 「兄たちは彼に言った。『おまえは私たちを治める王になろうとするのか。私たちを支配しようとも言うのか。』こうして彼らは、夢のことや、ことばのことで、彼をますます憎むようになった。」兄達は怒り心頭です。「お前は俺たちを治める王になるとも言うのか！ 思い上がるな！」兄弟たちは、ヨセフの夢とその言い方をみて、ヨセフを憎悪する感情を深めていきました。

### 3. 父もヨセフをいさめる (8~11 節)

①もう一つの夢 (9) 「ヨセフはまた、ほかの夢を見て、それを兄たちに話

した。彼は、『また、私は夢を見ましたよ。見ると、太陽と月と十一の星が私を伏し拝んでいるのです。』と言った。」ヨセフは夢をもう一つ見て、またしてもそれを兄弟達に伝えたのです。それは、太陽と月、そして 11 の星がヨセフを伏し拝んでいるというものでした。11 の星が 11 人の兄弟達のことであることは明らかです。それに加えて、今回の夢には太陽と月が加わっています。それは父イスラエルと母を意味しているのでしょうか。\*生みの母ラケルは既に死んでいますが、あくまでも夢です。夢の中では生きていても良いわけです。

②父の戒め (10) 「ヨセフが父や兄たちに話したとき、父は彼をしかって言った。『おまえの見た夢は、いったい何なのだ。私や、おまえの母上、兄さんたちが、おまえのところに進み出て、地にひれ伏しておまえを拝むとも言うのか』」今回ばかりは、父が黙っていませんでした。ヨセフ以外の 11 人の子どもたちの気持ちを代弁しました。それに、今回は父である自分と彼の母親までもが、彼の前にひれ伏すというというのですから、ヨセフを戒めないわけにはいきませんでした。

③兄たちと父の反応 (11) 「兄たちは彼をねたんだが、父はこのことを心に留めていた。」ここに至って、兄弟達はますますもってヨセフに対する怒りや妬みや憎しみの思いを強めていきました。それは、この後の事件の様子からすれば、相当なものであったことがわかります。折あれば、殺してしまおうとすら思うようになっていたのです。しかし、

一方の父イスラエルはしかりつけたとはいえ、このことを心に留め、その意味を考えていました。つまり、このことについては何らかの、主のご意図あるに相違ないと思うようになっていたのです。

《結論》 37 章以下はヨセフ物語ですが、2 節には「これはヤコブの歴史である」と記されているように、大きな流れの中ではヤコブ (イスラエル) の歴史の中に入るのです。創世記を見ていくと、確かにアブラハム、イサク、ヤコブに対して、主は祝福の契約を与えられ、書全体の経糸のようになっていて、民の礎となっています。とはいえ、この書の 37 章から 50 章にわたって語られているヨセフの生涯は、別の意味においては、重要な意味があることも確かです。ヨセフに与えられた出来事はとても興味深く、私たちの人生や信仰生活にも多くの示唆や導きを与えてくれます。

今朝の聖書記事を見る時に、ヨセフの性格がよく表れているといえましょう。青年ヨセフは人間的に言えば、人の気持ちがわからない男です。ヨセフ自身の立場になれば、兄たちを信頼していればこそ、無邪気に振舞ったのでしょうか。まだ 17 歳 (高校生ほど) ですから、自分の立場や環境をわきまえ、兄達の気持ちを察することはできなかったのだと思われる。ヨセフは父から格別の愛を受けていましたが、そのことによる兄達の反発を理解していませんでした。ですから、兄達の悪い噂の告げ口も平気でしてしまったのです。ヨセフは父ヤコブと似ているがありました。思い立ったことやアドバイスされた事を、あれこれ考えずに行うという点は似ていました。しかし、あまり似ていない所もあります。父ヤコブは母リベカから愛されました。双子の兄エサウが持つ長子の権や父からの祝福を奪うために策略を練るような面がありました。その結果は、エサウとの間に大きな確執が生じ、20 年間の断絶を経験したのです。それに比べると、ヨセフは策略家ではなく、信仰的で真っ直ぐな性格でした。

さて、ヨセフの見た夢ですが、二つの夢は同じことを示しています。ヨセフが 11 人の兄弟達の上に立ち、親すらも彼に頭を下げるようになることを示す夢に思えます。もし彼の自作の夢ならば、思い上がりというしかないでしょう。しかし、ヨセフ自身がその夢の意味は全くわからなかったのです。彼には親や兄達の上に立つといった野心はありませんでした。後年に、彼がエジプトの宰相になるなどは、誰が想像できたでしょう。その過程においてすら、思いつかないことでした。しかし、主なる神は、ヨセフの内に働きかけ、夢を見させて、はるか将来のことを預言しておられたのです。聖書の神は歴史を治めておられる主です。人知を越えた神のご計画がそこにあったのです。主は「すべてのことを働かせて益としてくださる」(ローマ 8:28) とあります。兄達の心象を害する意図から、ヨセフが夢を伝えるはずがありません。世慣れていなかったことにより、見た夢をそのままに語り告げただけなのです。結果とし

ては後年、兄弟達もその意味を確認することになるのです。今はわからないこと、理由もわからない困難や、理不尽な事態もありましょう。コロナ問題しかり、様々な難題も、人の理解を越えて事をなしてくださる主が、麗しいことへと導き（エレミヤ 33:3）、思い煩いを平安へと変えていってくださる（ピリピ 4:6-7) のです。慈しみ深い主を信じ、進んでいこうではありませんか。